

そこにいる子が子どもでもあるということ②

「子ども好き」という言説

浜口順子

(大学教員)

「〜するのが好き」という表現

学生が体験授業で幼稚園や保育所などを訪問し、保育を観察したり子どもと直接かかわったりした後、感想や印象を尋ねると、「〇〇ちゃんは水遊びが好きだ」とか「ままごとで動物役をやるのが好きな子が多い」などの表現をよく耳にする。その子自身が本当に好きかどうかわからない、という客観性の問題でもあるが、そのようなことを言つて、「記録には一切主観を挟み込んではいけない」などと学生が誤解しても困るので、むしろ「好き」という表現以外に言いようはないのか考えてもらうようにしている。「〜するのが好き」というのは、単にその行為をする頻度が高いとか、時間が長いという意味に過ぎないのではないか。

「〜が好き子ども」と一くくりにしてしまうと、それ以上「その子ども」への理解や興味は深まりにくくなるだろう。なぜ「好き」な（その遊びを頻繁にする）のか、さらに言えば、なぜそれを「好き」と表現してしまいたくなるのか、そこが根本的な問いとなる。

外で遊ぶのが好きな子どもは元氣だとか、じつとしてるのが嫌いな子どもは落ち着きがない、というような判断も、およそ子ども理解というものから逸脱している。そこにいる子どもが一人の人として独自に存在していることを実感できないのだろうか。

「子どもが好き」という言説

倉橋惣三が大正十二年に、「子ども好き」「子どものため」が世に流行していると書いている（評論「子どもばかり」―『児童研究』第二十六卷八号）。しかし「流行りはつづくものではない」とも。確かに今は、保育所が近所に建設されるというと反対運動が起こる時代である。本田和子の書名を借りれば、「子どもが忌避される時代」に突入しているのかもしれない。しかし、個人レベルの話ならば、まだまだ子ども好きの人は珍しくない。大学の授業で、保育者志望の学生にその理由を聞くと、「子どもが好きだから」と素朴に答える人が多い。そんなとき、「どんなふうに好き？」「なぜ？」と問い返したくなる。逆に「大人が好き？」という問いは成り立つのだろうか。

「保育者になるなら、子ども好きの明るい人がよい」とは、世間の一般的イメージであろう。しかし実際は、「子どものことは、はっきり言って嫌いです」とか「子どもは苦手です」などと遠慮がちに告白する学生も少なからずおり、話すとき意外に面白い。子どもの表情や素直さに戸惑ったり、子どもに対するときの自分の気持ちや価値観などを細かく省察したりする人こそ、苦手意識を持つことが多いようだ。自らを「子ども好き」と称して疑われない人より信用がおけそうな気がする。

子どもを好きな人は優しく、嫌いな人は冷たいというような社会的通念も作用しているだろう。ことに女性の場合、「母性愛」という概念が付きまとい、赤ちゃんを産み育てながら、わが子をかかわいく思えない、自分には母性愛が足りないのではないか、と思いついては自分を責める人が多いと聞く。核家族が増加し、夫の育児が「育メン」などと希少価値で評価される日本のことである。地域から孤立しやすく、その「地域」さえ無実化している都市部において、母親が子どもの顔を見て「かわいい」と思う余裕もなく、育児責任に押しつぶされそうになっているのもうなずける。子ども好きを単純に美化しない感覚が、保育者として正常なバランス感覚であり、保護者支援のために重要であると思う。

子どもに「瞬間」をよこす

津守房江は著書『育てるもの目』（婦人之友社 一九八四年）において、自らの家庭における子育てや、障害のある子どもの保育を通して出会ったささやかなエピソードをすくい上げては、周辺の事どもとの関係を織り上げながら、いつも新鮮な風のように、大人の子どもへのまなざしを爽やかに和らげ、理解を押し広げてくれる。著書の中に「足で叩く」という章があるが、いつも穏やかで優しくそんな著者にしては珍しく、子どもにも感情的な怒りを吐き出すシーンが出てくる。

一月十五日、成人の日のことである。私はこの日は朝寝をしようと楽しみにしていた。七歳を頭に四人の子どもたちは、この日も早くから起き出して騒ぎ始める。私はふとんにもぐって、頑張つて寝ていたけれど、トントン、トントン頭を叩くので、仕方なしに首を出してみた。三歳のA子が、

足で私の頭を叩いている。これを見ると、自分でも驚くほどの怒りの言葉が、とびだしてきた。

「叩かないでよ、足で叩くなんてひどい……。足で小突いて起されるなんて……」

驚いたA子の顔、眠そうな父親の顔、それを見ると、私は「しまった」と思った。私だけでなく、家族にとつても楽しみな休日の朝をこわしたのではないか。私は一息いれると、「さあこれでおかあさんが怒るのはおしまい。きょうは成人の日だけど、うちでは特別に「ヒスの日」っていうのよ。疲れたおかあさんは、きょうはいつでも怒っていいの」といった。「へー、こわい日だねー」と上の子が逃げるようすをしたので、また緊張がほだけ、私もほっとした。(Dp. 2425)

それから著者は、ある光景を思い起こす。A子とその妹P子（一歳）には、さらに下に妹がおり、その赤ちゃんがベビバスでお風呂に入ってもらっている様子を見物していた。その際、P子は自分でも入りたがるので大人が膝に抱いて守っている。しかしA子は「足がベビバスにふれていて、足の先を動かし続けて」いた。足で叩くことは、大人から見たら「不法なこととして否定」されることだけれど、著者はそれが、A子の強い抑制のサインであることに気付く。そうして、赤ちゃんのお風呂の後、小さいお姉さんたちA子とP子をねぎらって、ベビバスを貸してあげることにした、というのが後日談である。

津守房江先生は去る三月十日、この世を旅立たれた（享年八十五歳）。私が子育ての忙しさのピークに達していた頃、先生への年賀状に「早朝に一人で起き出して日の出の美しさに感動し、誰にも邪魔されず本を読めるひとときが至上の喜び」と書いたら、深くそして温かく共感してくださったことが忘れられない。心よりご冥福をお祈りいたします。